



シモマツチの 校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男 前岩手県立花巻北高等学校長

第11回

三流・二流・一流

□「すうがく通信」から

私は東日本大震災後の2年間、教育委員会に勤めていました。その中で私が力を入れていたものの一つが、県内の数学科教員全員に配信していた「すうがく通信」です。内容は学習指導や評価方法の工夫改善に関する記事、時には学校訪問と連動させた県内の優れた教育実践の紹介や、学校現場からの意見も取り上げていました。

また、数学とは何か、数学科の目標とは何か、そしてその中で数学教師の見識とは何だろう、というテーマもしばしば扱いました。このような問いを設定することで、職場で数学を論じあえる空気をつくろうという思いを込めておりました。なぜなら、震災後に、まず私たちがやらなければならぬのは、学校内、学校間に対話の場をつくっていくことではないかと思っていたからです。

さて、その通信で現場の先生方からとても反響が大きかった記事があります。それは次のようなものです。

以前、バスケットの専門家から三流、二流、一流の選手についてこのような話を聞きました。

三流選手の楽しみは、手を振く、さぼる、楽をして練習や試合をするというものです。そこには努力をしないで、ただ試合を楽しみましょうという考えがあります。

二流選手の楽しみは、試合の勝ち負けや良いプレイをしたら喜び、悪いプレイなら落ち込むなど、目の前の結果や外発的なやる気や報酬から行動するということです。

一流選手の楽しみは、うまくなること、チャレンジすること、ハードな練習を乗り越えること。そのスポーツが好きで、楽しむこと。自分の目標を決めて達成しようとすることです。自分との闘いができる、自分に打ち勝てる選手、つまり内発的なやる気を持った、自立した選手です。

このような考えは、部活動だけではなく、日々の学習にもよくあてはまることではないかと思います。ここで「選手」を、授業を受ける「生徒」と置き換えて、次のように読み替えてみましょう。

三流生徒の授業姿勢は、手を抜く、さぼる、居眠りをするというものです。そこには努力をしないで、ラクをして授業をやり過ごそうという考えが見られます。つまり彼らの満足は、できるだけ何もしないということです。

一流生徒の授業姿勢は、テストで良い結果が出れば喜び、誰かに成績が負けたという落込みなど、目先の結果や、居残り学習などのペナルティ、叱責などで行動が決定していくというものです。つまり、彼らのやる気は罰則や報酬など外発的要因によって生まれていると考えられます。

一流生徒の授業姿勢は、理解することへの欲求を持つこと、難問にチャレンジすること、そして、その科目の内容を楽しむ、面白がる姿勢を持つということです。わからないことに対してわかりたいという気持ちを持ち、自分に打ち勝つ内発的なやる気を持った主体的な生徒、こんな生徒が成功するのです。

この記事配信したところ、これを生徒に配りたいという声が現場からずいぶんと寄せられました。聞くと、「二流・三流」の

生徒たちが多いため、彼らを啓発する材料にしたいとのことでした。しかし、私はこのような反響に、ある種の違和感を覚えませんでした。なぜなら、私がここで本当に言いたかったのは、実は生徒のことではなかったからです。実際、この記事には次のような続きがあります。

「日々の授業を充実させるためには一流生徒の授業姿勢を身につけることが必要です。しかし、それは、生徒の能力や努力を待つのではなく、そのような生徒をつくる授業の構築が教師に問われているのだと思います」

私は別の号で、先ほどの「三流・二流・一流」の話の続きを以下のようにまとめました。

三流のコーチは、目先の結果や成績にこだわらず、成績がままならないと、時に、生徒の前で暴君のように振る舞います。基本的に、生徒の能力を信じていないので、課題やドリルを繰り返したり、練習時間を増

やすことで結果を得ようとしています。生徒に考えさせず、理屈抜きで自分の手法を押し付けます。

一流のコーチは、そのスポーツの楽しさを教えます。コーチがそのスポーツを愛していることが選手に伝わり、選手もそのスポーツが好きになります。なぜ、この練習が必要なのかを選手にきちんと説明します。そして、生徒に自ら考えさせることを大切にします。

一流の授業者は真摯に生徒に向き合い、教えることに情熱を持っています。単に、教科書の問題を淡々とこなすのではなく、深い教材研究に根差した教材観を持って、生徒が明日も勉強したくなるような気持ちにさせます。そして、生徒に考えさせ、発信させる取組みを行います。一流の授業者は、教科も生徒もどちらも大好きな人のことだと思っています。

受動的な生徒や、学びに対して後ろ向きの生徒を目の前にして、彼らを何とかしようと思えば思うほど、その思いのベクトルは、教師である自分に向けられていくのかもしれない。